

水害 昆虫サバイバル

小4田村君に「科学の芽」賞

一昨年9月に大規模な水害に遭った常総市で、浸水した土地にすんでいた虫たちはどうなったか？ 昆虫好きの小学4年生が現地調査を重ねてまとめたリポートが、筑波大学の「科学の芽」賞に選ばれた。125個の標本などを元に導いた結論は「虫たちの生命力は想像をはるかに超えていた」――。

「科学の芽」賞は小・中・高校生対象の理科コンクールで、11度目の今回は過去最多の2919点の応募の中から21点が選ばれた。つくば国際大学東風小（守谷市）4年の田村和暉君（10）は、県内から唯一の受賞者だ。

東風小は常総市の浸水域の南端から南に約7キロ。水害の痛ましいニュースは小学生の胸にも刺さった。同時に、校内や近所で「昆虫博士」の異名を持つ田村君は「数日浸水した地域で生き残った虫はいるのだろう

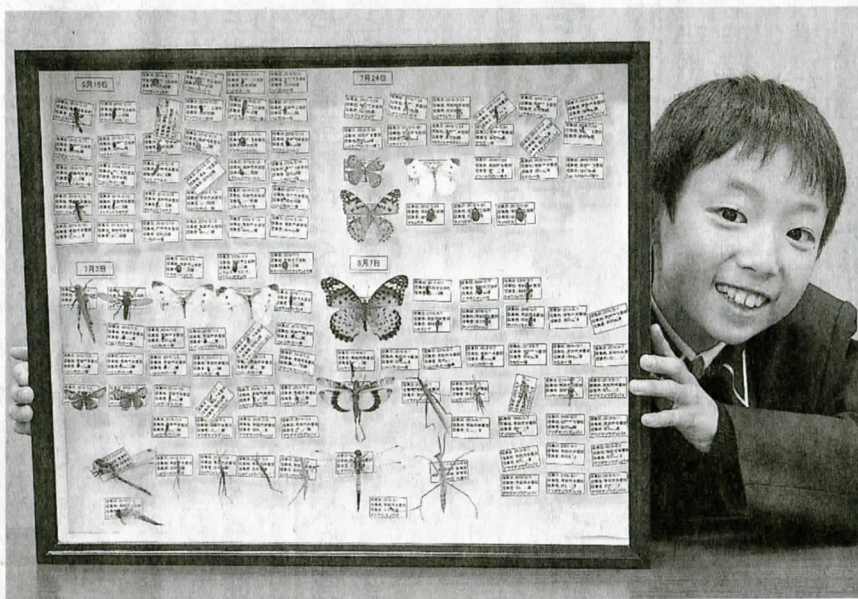
■ 生存？→常総の浸水域調査、採取し推察

か」と疑問を抱いた。半年が過ぎた昨春、県自然博物館（坂東市）の企画に参加して昆虫標本の作り方などの指南を受けると、夏までに4回、捕

虫網を手に被災地に通った。鬼怒川の堤防決壊地点から約800メートル離れた道路脇を調査地点に選び、虫を採取。その種類を、浸水を免れた堤防の高台と比較

した。その結果、二つの地点の差はほとんどなかった。土の中に巣を作るアリも多数見つかったことに田村君は驚く。「女王アリは5月から6月にかけて新しい場所に飛んでいって巣を作る。5月中旬にすでに立派な巣がたくさんあったということは、浸水に耐えて残ったのではないか」

（吉田晋）



常総市の被災地で採取した昆虫標本と田村和暉君

■ 結論→「想像を超える生命力」

図鑑などを読み込んで得た知識を動員し、虫たちが生き残れた理由を考察した。アリは巣の中に十分な空気が残り、コガタリリハムシは成虫が土中で休眠中、シヨウリヨウバツタは卵が土の中にあった――。

導いた仮説には専門家も舌を巻く。筑波大の戒能洋一教授は「昆虫の生活史を考えて類推して、どれも優れている。小学生でここまで観察・推察できるのは大したものだ」と話す。

小さな「昆虫博士」は、父親の泰盛さん（47）がつくば市の研究所に勤める害虫の研究者で、母親の佳代さん（35）も大学で応用昆虫学を専攻した経歴の持ち主。自宅で何種類もの虫を飼いい、日々新たな発見に目を輝かせる。「虫は人間がまねできないスゴわざを持っている」